



日本気象学会教育と
普及委員会編
教養の気象学

朝日書店, 1980, A5版,
224頁, 2,300円

本書は日本気象学会の「教育と普及委員会」が企画しそのメンバーが自ら内容の殆んどを執筆したもので、学会としてこのような広範な領域を含んだ気象解説書を発行するのは恐らく始めてのことで、学会の存在意義を高め、学会の支持者を増やすという見地からも観迎されるべきことで、一学会員として慶賀にたえない。

本書のまえがきによると、本書は(1)気象に興味を持つ一般の人々、(2)理科や地学の教育にたずさわる学校の先生方、さらには(3)大学教養課程の学生を対象として書かれ、気象学全般を展望し、その考え方や大筋を理解することを目標とし、予想以上に斬新な内容が盛り込まれているのだそうである。筆者も教員養成学部で講義を担当している関係上、特に上記対象者のうちの(2)の人々がどのようなバックグラウンドを持っているか少しは判っている積りだし、主としてそのような人々がこの本をどのように利用できるかということを考えながら読んでみた。

執筆のメンバーは総勢13人のうち9人が気象庁関係者、3人が大学教官、1人が東京都立教育研究所の指導主事ということで、研究者、教育者さらには日々の天気予報を出すのに苦勞している人々を含み、「気象学全般を展望する」のにうってつけのメンバーのようである。章のタイトルは、第1章から順に、地球と惑星の大気(22)、放射と気温(12)、大気の運動(19)、雲と雨(19)、天気の変化(22)、天気図と天気予報(21)、世界の気候(10)、日本の気候(7)、気候の変動(12)、学校における気象観測(28)となっており、()内の数字はそれぞれの章ごとのページ数である。このようなタイトルを眺めただけでこの本の内容の巾広さがわかるし、またページ数の配分から委員会の意図が推察される。

始めから通読して見てまず感じることは、見やすい図が多く、見開きのどちら側のページにも図がないという所は数える程しかなく、肩のこらない読みものとしても読みやすいことである。図の多いのと反対に数式は殆んどなく、これも一般の人々に読みやすさを提供するものであろう。この種の本で大切なことは数式を用いずに数式の持つ物理的或いは気象学的な意味をやさしく解説することである。数式と言えば、始まりの第1章にこの本

の中の数式の大部分が集中しているようで、本の始めから丹念に読まねば気のすまない文系の大学教養課程の諸君には嫌がられるかも知れない。しかしそのような読者に申し上げたいのは、それらの式が判らなければ別に構わないからどんどん飛ばして読んで頂けば良い。後でそれらの式が引用されることもないので気楽に先を読めば良いということである。この第1章の後の方では地球大気と金星や火星の大気とが比較されているが、あたかもSF小説を読むように面白い場面で用意されている。

この本のもう一つの特徴は巻末の「読者への手引」にある。このうちの文献案内は他の同種の本にも見られるが、日本気象学会の利用と、気象資料とその入手法についての記述はユニークである。気象資料についても少し丁寧に、例えばどのような要素についてか、なども書かれていたら学校の先生方に利用者が多いに違いない。

さて、最初に書いた「学校の先生方にどのように利用できるか」について感じたことを一言。学校の先生といっても多様である。小学校の先生方や中・高校の理科以外の先生方についてはこの本はとにかく「教養書」以外の何ものでもない。中学校の理科、高校の地学の先生には誇張でなく明日の授業に役立つ。さらに言えば1年後に控えた高校理科カリキュラム改訂に備え、特に理科Iを担当せねばならない先生には是非一読をおすすめしたいし、理科IIの「課題」のヒントが必ずやこの本から得られるであろう。

最後に若干の希望を述べさせて頂くと、気象と人間環境とのかかわり合いについての記述が淋しいこと、地衡風と温度風との関係がもう少しわかりやすくなりませんかと思ったこと(気温の水平傾度とコリオリ力の鉛直差がつりあうとあるが、温度差と力とがどうやってつり合えるのか、わかりやすいとは思えない)、うず度のわかりやすい説明はないか、単位の統一にもう一頑張りすべきでなかったかなどが多少とも気になった。また最後の章には現在殆んど使用されなくなった測器も記述されている。恐らく「理科教育振興法」に指定されている測器を網羅されたのだろうが、そのようなものの指定の際に、学会がその影響力を及ぼせる程に生長することが大いに期待される。と共に最近の「天気」で知ったが本書が学会としては取り扱わないことになったそうだが、それも折角苦勞して生んだ子を早々と養子に出してしまうようで残念なことである。

(佐橋 謙)